メルマガ第 259 号

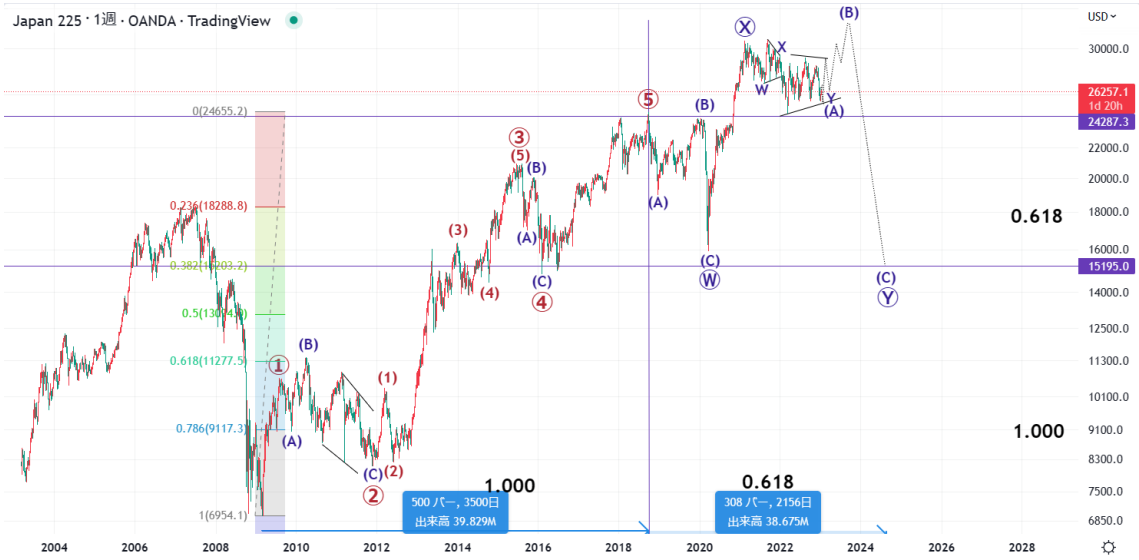
令和 5 年 1 月 14 日発行

一般社団法人日本エリオット波動研究所

今回は 225CFD について再検証を試みたい。

現時点でのメインカウントは次のようになっている。

（週足）・現時点



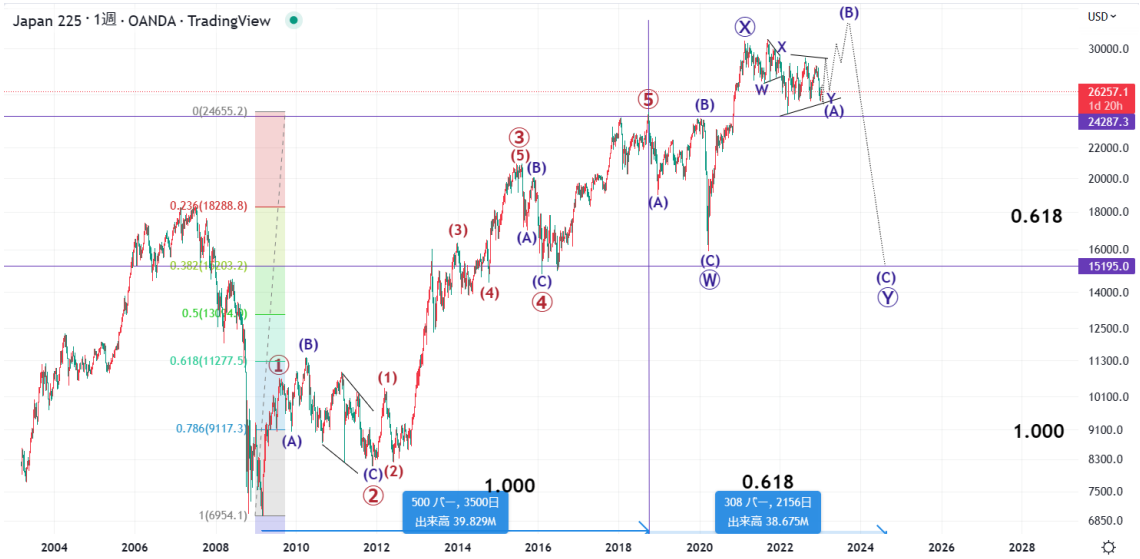
サブカウントは次の通りだ。

（週足）・現時点

これらはいずれも代表的な大まかなカウントであり、プライマリー級に満たない波動に関しては他にも多くのカウントがある。

まずは、メインカウントとサブカウントのうち、優位性が高いのはどちらであるのかを考えてみよう。

メインカウント（週足）・現時点



まずはメインカウントに優位性を与える証拠（サブカウントに対して優位という意味ではない）としては次のようなものがある。

①リーマンショック後安値を始点とするサイクル級のインパルス（①②③④⑤）がほぼ④波終点の位置で黄金分割されている

②プライマリー級④波終点がプライマリー級③波の副次波(4)波終点に近い

③プライマリー級③波の副次波(3)波の３波が最も直線的且つ急角度で上昇している。(③の(3)の３波というカウントに相応しい)

④サイクル級の修正波のうち、Ⓧ波による上昇はコロナ禍の中の株高であり、世間一般の景況感から乖離した動きはⒷ波またはⓍ波の特徴と言える

⑤普通目盛りで表示すると、サイクル級のインパルスがきれいにチャネルに収まる

⑥プライマリー級③波の副次波(3)波の３波が特徴的なスパイクハイの形状になっている。

サブカウント（週足）・現時点

一方、サブカウントに優位性を与える証拠としては、次のようなものがある。

①サイクル級のインパルス全体がほぼチャネルに収まっている。

②プライマリー級④波がプライマリー級③波の副次波(4)波が動いた範囲で終わっている。

③プライマリー級③波の副次波(3)波の 3 波が最も直線的且つ急角度で上昇している。(③の(3)の 3 波というカウントに相応しい)

④プライマリー級③波の副次波(3)波の 3 波が特徴的なスパイクハイの形状になっている。

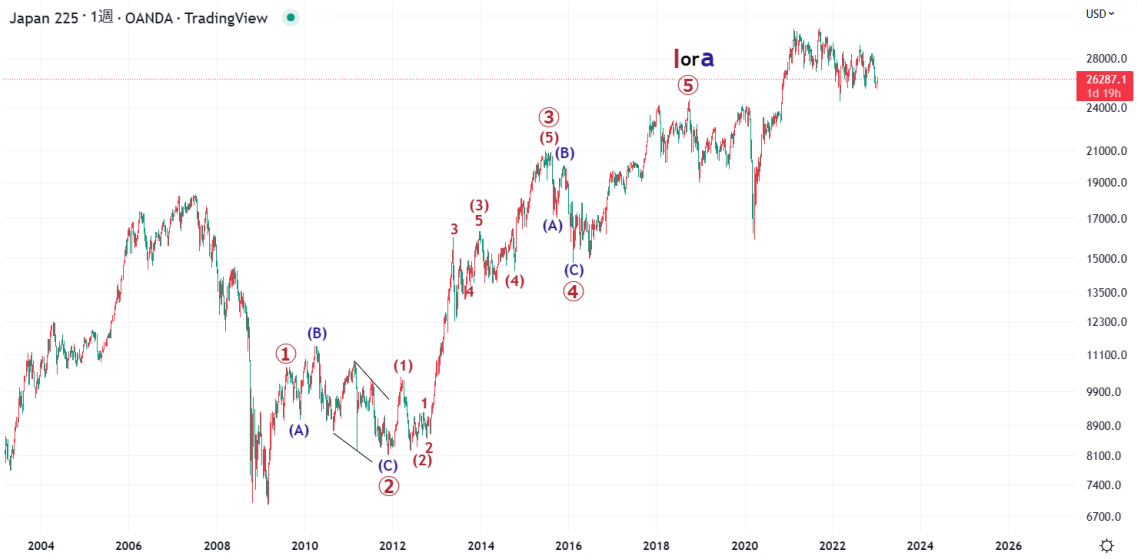
しかし、ここに挙げたサブカウントに優位性を与える証拠は全てメインカウントに優位性を与える証拠に準ずるものであり、これをもってサブカウントがメインカウントとよりも優れているということにはならない。

また、サブカウントを成立させるためにはプライマリー級⑤波部分を次のようにカウントするのが妥当と思われるが、このカウント自体ガイドラインとの不適合な部分が多い。(8 時間足)・メルマガ第 255 号掲載分

このように比較検討してみると、メインカウントの方がサブカウントよりも優れていることは明らかであろう。

よって、今後は、次のように 2018 年 10 月高値をもってリーマンショック後安値を始点とするサイクル級のインパルスが完成したというカウントを半ば確定的な事実として認識していきたいと思う。

（週足）・現時点



次に 2018 年 10 月高値から、2020 年 3 月のコロナ安値までは、次のようなフラットというカウントをこれまでメインとしてきた。

（8 時間足）・現時点

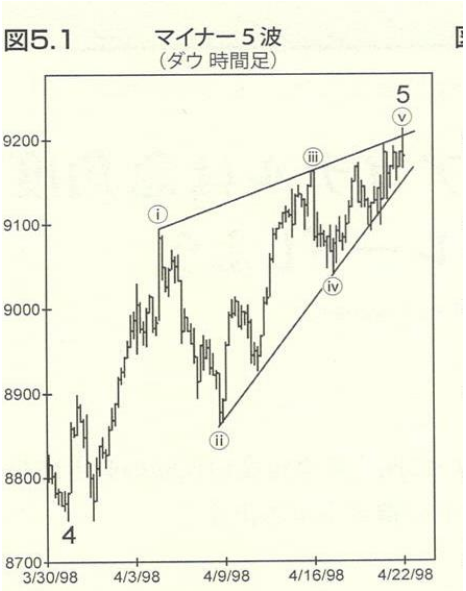
ちなみに、(C)波部分は、次のようにインパルスとカウントできる。

（4 時間足）・現時点

ここでは 3 波の(v)波がエンディングダイアゴナルとカウントしている。5 波まで完成した後の反発局面では、そのダイアゴナルの ii 波終点付近がレジスタンスラインとして機能していることが分かる。

エンディングダイアゴナル完成後は「その始点まで速やかに戻る」というガイドラインは有名である。この場合「速やかに」とは、ダイアゴナル完成にかかった時間の半分、またはダイアゴナル完成にかかった時間よりも短いと一般的には解釈されている。しかし、当研究所の観察データによると、エンディングダイアゴナル完成後の戻り目途は必ずしもダイアゴナル始点ではなく、ダイアゴナルの副次波 2 波終点付近であることが多いことが分かっている。

また、ウェイン・ゴーマンらによる「Elliott Wave Trading」の邦訳版である「エリオット波動トレード」（パンローリング刊・翻訳は当研究所）には、エンディングダイアゴナルの事例として、右図が掲載されている。そして、同書の別ページには、「素早く鋭い反転の動きが起こって少なくともダイアゴナルの始点までは動き、通常はそれ以上の動きとなる。この反転の動きにかかる時間は、ダイアゴナル形成にかかった時間の 3 分の 1 から 2 分の 1 と短い場合が多い」　と書かれている。



ところが、右の図で示されたダイアゴナルは実

際には、次のチャートのような位置に出現している。（日足）

ダイアゴナル完成後の急反転の動きで戻ったのは、(ii)波終点付近までであることが分かる。ダイアゴナル始点まで戻るには、ダイアゴナル完成に要した時間の約 3 倍の時間が掛かっている。

「Elliott Wave Trading」で事例として紹介されているダイアゴナルが同書で説明されている「通常の」動きになっていないのだ。しかし、これこそがリアルなダイアゴナルであり、ダイアゴナル完成後の動きである。つまり、巷でガイドラインとされているものは「理想」に過ぎない。ダイアゴナル完成後にその始点まで株価が戻るのに要する時間も「ダイアゴナル完成後に要した時間」より多いことも珍しくはないのだ。

話を 225CFD に戻そう。4 ページでフラットとカウントした波動は、次のように(B)波が(A)波を 91%程度しかリトレースしていない。（8 時間足）

B 波が A 波を 90%以上リトレースするというのがフラット成立の条件となっているから、91%のリトレースが認められる当該波動をフラットと認識することにルール上の問題はない。

だが、ガイドライン的には 100%以上戻ってほしいところだ。

そこで、代替カウントとして挙げておきたいのが次のダブルスリー説だ。

（8 時間足）

さらに、このダブルスリー説の代替カウントとして、次の(B)波ダブルスリー説もある。この場合、全体としては、(A)(B)(C)のフラットになることから(B)波によるリトレースがやや少ないという問題は解消されていないことになり、わざわざこのカウントを持ち出す合理的な理由はなさそうだ。

（8 時間足）

いずれにせよ、2018 年 10 月高値から 2020 年のコロナ安値までは一つの修正波としてカウントできることに間違いはなさそうだ。

次に問題となるのが、コロナ安値からの上昇波動である。
安値から高値までを捉えると次の波動ということになる。
（日足）・現時点

この上昇波動すべてをインパルスと捉えるなら、例えば次のようなカウントになるだろう。
（8 時間足）・メルマガ第 255 号掲載分

しかし、これまでに何度も言及してきたように、このインパルスは波の数だけは合っているが、全体がチャネルから大きく逸脱している概観を筆頭にガイドラインとの不適合箇所があまりに多い。

また、3 ページにも提示したように、2021 年 2 月 16 日高値までをインパルスとする次のようなカウントも可能ではあるが、これもガイドラインとの不適合という点では、前ページ下のカウントよりは「まし」という程度の評価になるだろう。

（8 時間足）・メルマガ第 255 号掲載分

そもそも、4 ページで「今後は、次のように 2018 年 10 月高値をもってリーマンショック後安値を始点とするサイクル級のインパルスが完成したというカウントを半ば確定的な事実として認識していきたいと思う」と結論付けているのだから、コロナ安値からの波動がインパルスである必要はない。

すなわち、2018 年 10 月にリーマンショック後安値を始点とするサイクル級の推進波が完成して以降は、サイクル級の修正波が現在も進行中というカウントをベースに波形認識を進めて行けばいいということだ。

（週足）・現時点

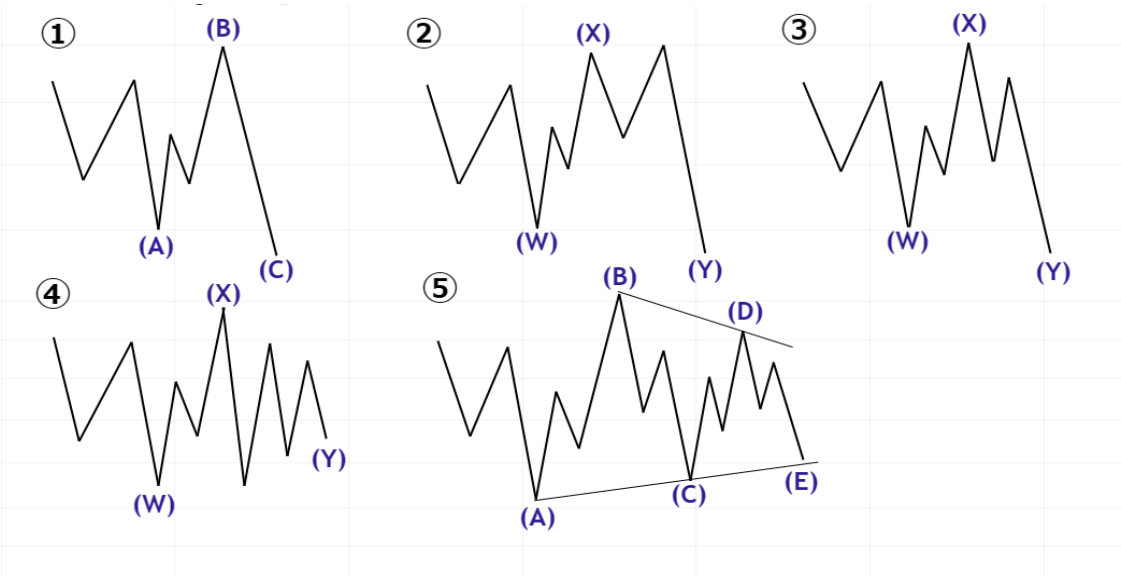
つまり、今後の 225CFD 或いは日経平均の進行を想定するというのは、次のチャートの網掛け部分がどのような修正波を形成中であるのかという命題と同義であるということになる。

（日足）・現時点

まず、6 ページから 7 ページに展開した考察によって、次のチャートの網掛け部分が、フラットまたはダブルスリーであるという暫定的な結論を得ている。

（日足）・現時点

前ページ下のチャートの網掛け部分がフラットまたはダブルスリーであることを前提にすると、修正波全体としては次のような波形を形成中であることが想定できる。（トリプルスリーは出現頻度が低いことと、トリプルスリーを形成する過程で必ずダブルスリーが形成されることから今回の例示から除外してある）



①はフラット、②は(Y)がフラットのダブルスリー、③は(Y)がジグザグのダブルスリー、④は(Y)がトライアングルのダブルスリー、⑤は(A)波がフラットのトライアングルである。

では、①から⑤までそれぞれの波形で進行した場合、実際の 225CFD のチャートがどのようにカウントされるのかを試行してみよう。

まず、①の場合である。①では全体がフラットであることから、(A)波にはフラットとダブルスリーのどちらの波形も出現することが許容されている。左の例示では、(B)波をダブルジグザグと想定した。(B)波の W 波のカウントに関しては、次ページに解説する。

前ページ下のチャートの(B)の W 波部分の波動については、3ページと9ページにてインパルスとしてのカウントを提示し、それが著しくガイドラインとの適合を欠いていることを説明した。

そこで、これまで、次のようなジグザグ系の修正波というカウントを当メルマガではメインとして提示してきた。

ダブルジグザグ説（8時間足）・メルマガ第255号掲載分

二重のダブルジグザグ説（8時間足）・メルマガ第255号掲載分

今回も、これらのいずれかのカウントをベースに、①から⑤までの波形での進行をシミュレートしていくものとする。

①のパターンで下方の動きに警戒が必要なのは次のようなダイアゴナルで(C)波が進行していた場合である。

ただし、このカウントが成立するには(B)波の終点が左図のような位置にくる必要がある。

そのためにはメルマガ第 242 号に提示した、右上のチャートのようなカウントが必要になる。このカウントが絶対に間違いであると断定するに値する証拠はないが、(X)波が異常に小さいなど、「恣意的」カウントと言わざるを得ないだろう。

次に②の場合を見てみよう。これは、(W)波と(Y)波の両方がフラットのダブルスリーという波形である。ダブルスリーではアクション波にはシングルの修正波しか出ないというルールがあるから、(W)波はフラットとカウントされることになる。

(Y)波フラットにおいて、どこまでが A 波でその波形が何であるのかについては、後から考察したい。

続いて③だが、これは(W)がフラット、(Y)がジグザグのダブルスリーという波形になる。

この波形が実現するには、前ページに提示した次のようなカウントを採用しない限り現在も(X)波が進行中というカウントになる。

ここでは、カウントの一例として(X)波が二重のダブルジグザグになるパターンを例示した。

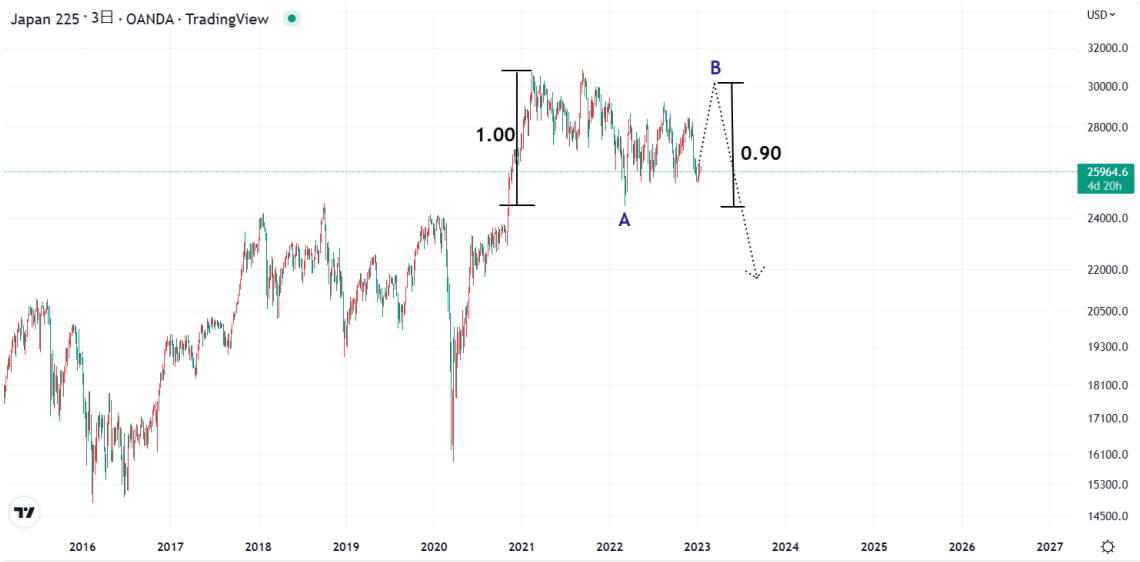
④は、(Y)波がトライアングルのダブルスリーという波形だ。ダブルスリーでは原則として、(W)波と(Y)波は同じ価格帯で波形を形成し、ダブルスリー全体として横ばいの動きになるとされている。よって左図のような(Y)波トライアングルが想定されるが、現在の波動進行からは、そのA波はフラットになることを想定するのが最も合理的ではないだろうか。

⑤のトライアングルでの進行を現在のチャートに当てはめるなら左図のようになるであろう。(A)波がフラットのランニングトライアングルという波形である。

このように、次のチャートの網掛け部分がフラットまたはダブルスリーであるという前提から想定し得る様々なサイクル級の修正波の進行想定を列挙してみると、ある統一した動きが見えてくる。

それは、次のように、まず 2021 年 2 月高値を超えて、そのあと大きく下げるという動きである。（3 日足）・現時点

ただし、2021 年 2 月高値からフラットが進行中で、その A 波が 2022 年 3 月安値で完成したというカウントでは、B 波が A 波の 90%に到達する株価は 30170 円程度であるから、必ずしも 2021 年 2 月高値を超える必要はない。



つまり、①から⑤までのいずれかの波形が実現するのであれば、現在の水準で買って 30000 円程度に戻ったときに売れば「必ず儲かる」ことになる。

ただし、例外がある。

繰り返しになるが、コロナ安値から 2021 年 9 月高値までを左図のようにダブルジグザグとカウントすることが正しかったときだ。そのときは次のような進行になる可能性があるからだ。

では、ここからは次のチャートの網掛け部分がどのようにカウントできるかを検証することで、サイクル級の修正波が 11 ページに提示した①から⑤のどのパターンに近い動きをしているのかを考えてみたい。

（日足）・現時点

まず、1 つ目のカウントは、11 ページに提示した①のパターンにおける(B)波が WXY のダブルジグザグで進行中というものだ。

（日足）・現時点（カウント A）

2022 年の 3 月安値をもって X 波がフラットで完成し、そこから Y 波がダブルジグザグを形成中というカウントになっている。

①のパターンが成立するには次のようなカウントもある。

（日足）・現時点（カウント B）

ダブルジグザグの X 波がトライアングルを形成中というカウントである。

現在はトライアングルの(c)波進行中と見られるが、その詳細については後から考察したい。

さらに、上のチャートのカウントと本質的には変わらないが、X 波がダブルスリーを形成中というものもある。

（日足）・現時点（カウント C）

これらのカウントは、①の他、③や⑤のパターンでも有効である。

また、次のように、2021 年 2 月高値を始点とするフラットを形成中という想定では、フラットの A 波にはトライアングルは出現しないことから、18 ページに提示した 2 つのカウントのうち次のようなダブルスリーというカウントのみが許容されることになる。

（日足）・現時点（カウント D）

このような 2021 年 2 月高値を始点とするフラットが進行中であるというカウントは、一回り大きな波動の進行が、②または④のパターンであるときに有効となる。

2021 年 2 月高値からフラットが進行中という想定での、フラット A 波及び B 波のカウントとしては、次のようなものも候補に挙げることができるだろう。

（日足）・現時点（カウント D）

ここでも B の(x)波が完成したかどうかについては後で詳細に考察したい。

その他の可能性としては、2021 年 2 月高値から次のようなダブルスリーが形成中というカウントがある。このカウントでは W 波と Y 波の終点がほぼ同値となり、全体として横ばいの動きであることからダブルスリーの性質と合致している。

（日足）・現時点（カウント E）

このカウントはすでにお気づきの通り、E 波自体がトライアングルである、つぎのトライアングルのカウントと置き換えることも可能だ。

これらのダブルスリーまたはトライアングルは、18 ページのチャートの X 波に該当することになる。（ダブルスリーの場合は 19 ページ上のチャートの A 波にも置き換え可能）

さらに、一度除外した次のようなカウントも改めて提示しておきたい。

（日足）・現時点（カウント F）

前回このカウントを「考えにくい」として除外したのは、その前提として 11 月 11 日或いは 11 月 24 日を始点としたフラットが進行中というカウントをメインとしていたという理由があった。

また、11 月 11 日或いは 11 月 24 日を始点とするフラットが今年 1 月 4 日をもって完成しているとすれば、ここから当分の間は 1 月 4 日安値を割らずに上昇を見込めるが、その上昇が 10 月 3 日を始点とするフラットの C 波である可能性もある。その場合 10 月 3 日を始点とするフラットは次のチャートの x 波に該当すると想定できる。

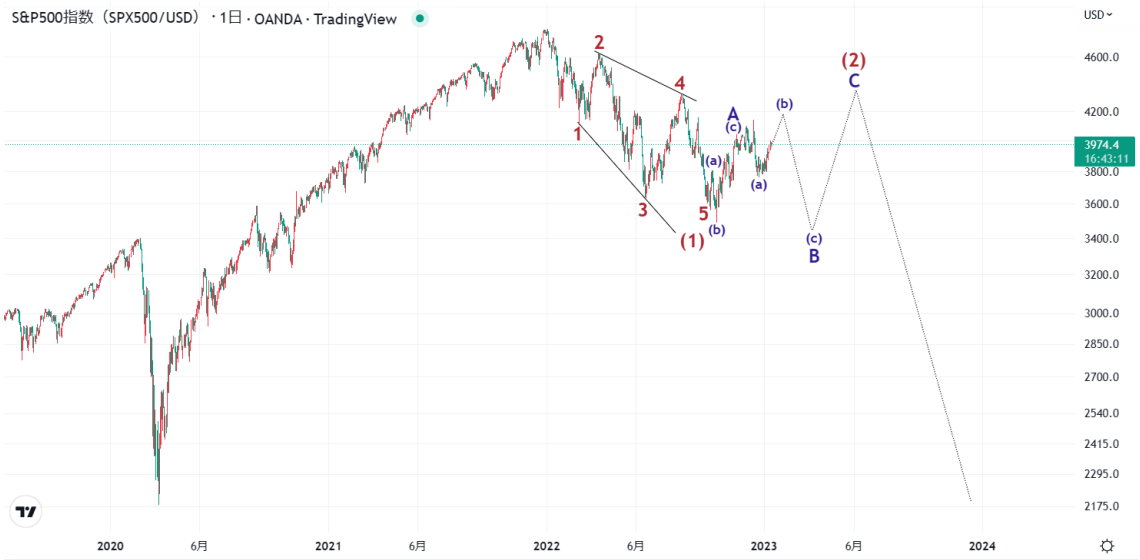
（日足）・現時点（カウント G）

2021 年 2 月高値を始点し、現在もなお進行中の波動には他にも様々なカウントが可能である。しかし、どのようなカウントであれ、2018 年 10 月高値を始点とするサイクル級の修正波全体としての動きは、11 ページ以降に提示したいずれかの波形に収斂される可能性が極めて高いというのがここまでの考察による暫定的な結論である。

さて、最後に提示した 225CFD のカウントには特別な意味がある。

それは、以下に提示するアメリカ株指数の進行想定と動きが相関しているからだ。

S&P500（日足）・現時点



ダウ（日足）・現時点

ナスダック 100（日足）・現時点

ちなみにメルマガ第 256 号でのナスダック 100 のカウントは次のようなものであった。（8 時間足）・メルマガ第 256 号掲載分

フラットの(A)波自体が現在もなお進行中というのが現時点でのメインカウントとなっているが、S&P500 やダウとカウントを合わせるなら、メルマガ第 256 号のものの方が適切かも知れない。

また、メルマガ第 256 号では、ダウに関して次のようなカウントを提示してあるが、これも今後の進行に関しては、今回提示のものと方向性と転換のタイミングという点では同一の見解となる。

（8 時間足）・メルマガ第 256 号掲載分

よって、このカウントも継続して観察の対象としたい。

改めて 21 ページに提示した 225CFD のカウント G をここに貼っておこう。

（日足）・現時点

実際にこのように動くという証拠も保証も一切ないが、このように進行を想定すれば、全ての指数の波形が副次波までルール通りにカウントすることができ、且つ、4 つの指数同士が相関することになる。

ダウのチャートを 4 時間足で拡大すると次のようになっている。

（4 時間足）・現時点

ナスダック 100 の 4 時間足では次のようになる。

（4 時間足）・現時点

進行に要する時間はおよそのものでしかないが、上のチャートでは、(A)波の終点が 2 月 3 日、(B)波の終点が 3 月 21 日、すなわち、「節分天井彼岸底」となるように描画してみた。

※ここまで 1 月 13 日時点の見解

さて、今週のニューヨークマーケットも残すところあと 1 時間となった。現在のチャートで 225CFD の詳細な動きを確認しておこう。

前号では、8 月高値からの波動カウントに関し、次の 2 案を提示した。

ダブルジグザグの(Y)の B 波進行中説
（2 時間足）・前号掲載分

ダブルジグザグ完成説
（2 時間足）・前号掲載分

現時点では、それぞれ次のようにカウントできる。

ダブルジグザグの(Y)の B 波進行中説（現在はダブルジグザグの(Y)の C 波進行中説）
（2 時間足）・現時点

ダブルジグザグ完成説
（2 時間足）・現時点

ダブルジグザグ完成説は首の皮一枚で繋がっているような状態であるが、紫線を割れば直ちに破綻となる。

これらのカウントの一回り大きな波動は 17 ページから 21 ページにかけて提示したカウント A からカウント F のような動きが想定される。

また、「ダブルジグザグの(Y)の C 波進行中説」が実現して、C 波が大きな下落に発展すると、メルマガ第 245 号で警戒していた次のカウントが復活する可能性にも留意したい。

（日足）・メルマガ第 245 号掲載分

これを現時点のチャートにあてはめると次のようになる。

（日足）・現時点

また、21 ページに提示したカウント G のように動くのであれば、現時点での波動は次のようにカウントされることになるが、これも「ぎりぎりセーフ」状態であることは見ての通りである。

（2 時間足）・現時点

一方で、アメリカ株指数は 13 日の寄り付きこそ大きく下落して始まったが、その後は切り返しを見せて前日比プラス圏で推移している。

25 ページに提示したダウのカウントも次のように継続している。

（4 時間足）・現時点

ここにきて、円高の動きによってアメリカ株指数と 225CFD の動きに乖離が見られるようになってきた。これまでのようにダウやナスダック 100 などと、225CFD の相関を重視したカウント及び進行想定の作成に見直しを迫られる可能性にも留意したいところだ。

最後にドル円を見ておこう。

前号では次のような2021年年初からのインパルスが5波ダイアゴナルをもって完成した可能性に言及した。

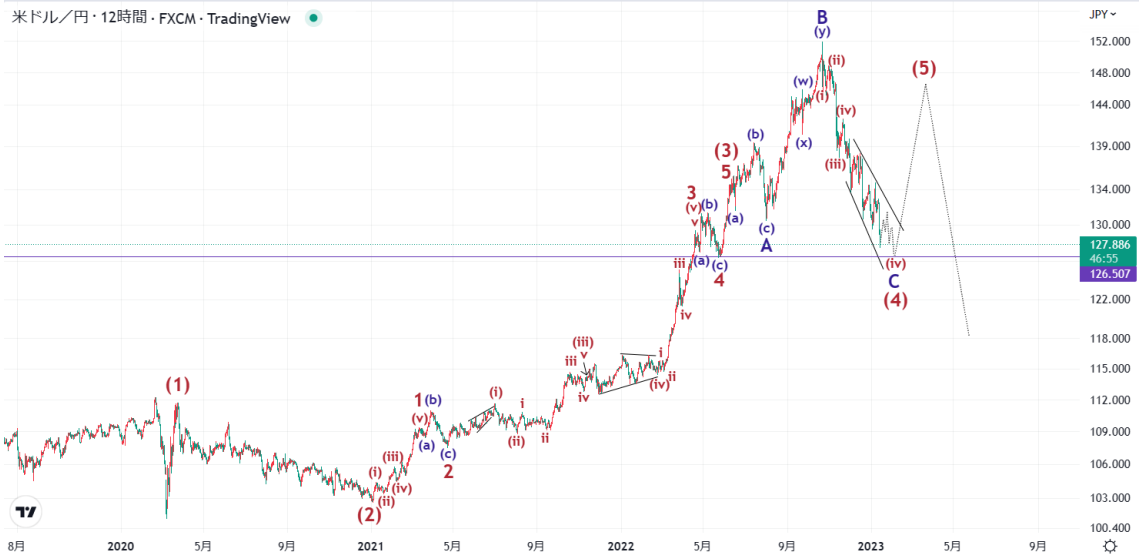
（12時間足）・前号掲載分

このカウントの問題点としては、ダイアゴナルなのに(i)波と(iv)波が重なっていないことを挙げることができる。

また、この場合の、一回り大きな波動の解釈の一つとして次のように(C)波が進行しているというカウントを提示した。

（週足）・前号掲載分

今回提示するのは、「ダイアゴナルの(i)波と(iv)波が重なっていない」問題に対応した代替カウントである。(12 時間足)・現時点



2021 年年初からのインパルスが 2022 年 6 月に完成していたというカウントである。その後の動きはフラットを形成した(4)波の波動であったという解釈になっている。ガイドラインに従い(4)波終点を(3)波の副次波 4 波終点の位置と想定してある。

この場合、一回り大きな波動のカウントは次のようになる。

(週足)・現時点

今週は以上である。

日本エリオット波動研究所　所長

【お知らせ】
バックナンバーはメルマガ購読者のみを対象に一号につき 500 円で頒布しています。お問い合わせは担当者（hirano@jewri.org）までお願いいたします。

ご留意していただきたいこと　（必ずお読みください）

提示してある想定はメルマガ執筆時点でのものでありその後の波動進行によって予告なく随時変更していく可能性を含んでいます。

このメルマガでは TraidingView のチャートを使っています。　特に断りがない限り、エリオット波動の基本概念に則り、ログスケールのチャートを採用しています。

エリオット波動の記号に関して、同じチャート内ではディグリーに応じて記号を使い分けていますがその表記は適宜任意のものを使用しているため標準表記（プライマリー級＝①、Ⓐ インターミディエット級＝（１）、(A)、マイナー級＝１、A など）になっていないものもあります。また、時間軸の違うチャート同士では同じ波動であっても、便宜的に違うディグリーの記号になっている場合もあります。

原則として 225CFD のチャートを使って今後の想定を立てています。

メルマガで提示した想定はエリオット波動による分析の結果導かれるものの一つに過ぎず相場予想ではありません。また、それに基づいたトレードを推奨するものではありません。　また、提示してあるものの他にも複数の想定が存在します。

　このメルマガの内容に関するご質問およびご意見は　必ず本名を明記の上、info@jewri.org までお願いいたします。ほかのメールアドレスにきた当メルマガの内容に関するご質問には返答いたしかねます。hirano@jewri.org にメルマガの内容に関するご質問をお寄せいただいても返信はいたしかねます。　また、著者へのご連絡は arikawa@jewri.org にお願い致します。